

学び合いをつくり出す算数科授業づくり ーユニバーサルデザインの視点を手がかりにー

学籍番号 239348

氏 名 浦田真緒

主指導教員 吉田茂孝

副指導教員 田中真秀

1. 背景と目的

文部科学省（2022）の調査によると、学習面や行動面で著しい困難を示す児童生徒の割合は小・中学校で 8.8%に達している。通級による指導を受ける児童生徒も約 2.5 倍に増加しており、従来の通常学級の教育では多様な子どもたちのニーズへの対応が困難になりつつある。これまでの障害児教育では、特別支援学級や通級指導教室が特性に応じた指導の場として選択されてきた。通常学級にも困難を抱える子どもたちが増えており、多様なニーズへの対応がより一層求められている。文部科学省も、学習や行動に著しい困難がない児童生徒も含めた支援の必要性を指摘しており、全ての子どもに効果的な教育の提供が求められている。

加えて、新型コロナウイルスの影響により、幼少期に他者と関わる経験が不足したことで、コミュニケーション能力の発達が遅れた子どもが多く見られる。本学年の子どもも、教室に戻らない、板書をノートに書き写さない、立ち歩くなどの行動が日常的に見られ、授業中に抜け出す子どもへの対応が難しい状況にあった。支援担任や他の教職員も手が回らず、結果として授業から離脱する子どもが放置されていた。その結果、教室に残る子どもも、授業に集中できず、学級内の関係性が悪化していた。特別な支援を受ける子どもも、個別学習が中心で学級全体の授業に十分に参加できず、学習面や社会的な成長に課題があった。

中央教育審議会（2012）や大阪府教育委員会（2014）をはじめ、小貫悟・桂聖（2014）なども指摘するように全ての子どもが授業内容を理解し、学習活動に参加できる環境整備の必要性を強調している。これらの背景から、全ての子どもが理解しやすい授業を目指し、指導方法にユニバーサルデザインの視点を取り入れることが重要であると考えた。特に、他者意識の低い子どもが教室で学ぶ意義を感じられるよう、子ども同士が関わり合いながら学ぶ「学び合い」の授業づくりが必要だと判断した。同じ教室で過ごすからこそ、他者との関わりを通じて学ぶことは、発達障害の可能性のある子どもをはじめ、コロナ禍でコミュニケーション経験が不足した子どもなどにも有効である。

先行研究では、学び合いの動向を整理するため、『学び合い』や「学びの共同体」、「協同学習」などを考察した。けれども先行研究の実践は、学級での仲間意識が事前に形成されていること、子ども個人に他者を尊重する意識が育っていること、が前提に考えられており周りとの関わり方やコミュニケーション能力が育っていない実習校の子どもたちには、先行研究のような授業をそのまま行うのは困難であった。

以上から、本研究の目的は、他者意識の低い子どもたちを含む全ての子どもに学び合いをつ

くり出すためにはどのような工夫が必要なのかを、学級全体の理解を目指してユニバーサルデザイン視点の手がかりに明らかにすることである。

2. 授業実践

発展課題実習Ⅰでは、2024年6月に小学校算数2年生「時こくと時間」の単元において、ゲーム性のある活動から学び合いをつくり出す授業を行った。教科書通りだと、時計の読み方の確認、目盛りの見方、時刻と時間の違いが学習内容であったが、子どもの様子から時刻と時間の違いについて本時には含めず、1時間が60分であることを中心に学習を進めた。ペアで考えを伝え合うことや、解答を確認し合う活動を日常的に取り入れ始めているという状況から、他者との関わりを楽しんで行えるよう活動を工夫した。内容としては、一人が合わせた時計の針を見て、もう一人が答えるというものである。しかし多くの子どもたちは相手が答えにくい難しい問題を出そうという気持ちで活動に取り組んでいたため、ペアのどちらも読み方が曖昧な時間を指して間違った認識のまま進めている子どもたちも見られた。このようにゲーム性があるものは子どもたちの興味を引きつけて学習に向かうようにするには有効ではあるが、6月という学級が出来上がりつつある段階にあり、他者との付き合い方が未熟な本学級の子どもにいきなり活動の時間を与えるのは困難であった。

発展課題実習Ⅱでは、2024年10月に小学校算数2年生「かけ算(2)新しい九九の作り方を考えよう」の単元において、学び合いをつくり出す授業実践を行った。ここでは、教員からの働きかけにより学級全体で学び合うことを目指した。本実践の内容は、既習のかけ算を表に書き入れ、それを元にかけてのきまりを見つける内容である。ここで求めるきまりは、①かける数が1増えるとかけられる数分増えること、②1の位が繰り返していること、の2点である。教科書では2の段が既にうめられた表から学習を進めていく流れであったが、本学級の子どもは支援学級在籍の子どもも含め、かけ算をまだ覚えていない子も多い。その中でも2の段が1番身についていたため、ここを書きながら表の見方を学ばせたいと考え、2の段から書き込める表を作成し使用した。学び合いをつくり出す授業づくりとして、子ども同士が関わる時間を増やし、意見をつなげる工夫を行った。結果として、①互いに高め合う姿勢が身についていない子どもたちにとっては、ただ話すだけの時間になり効果は薄かった。②学級全体での意見共有の際に教員が間に入り意見の共有や流れをつくること、意見の理解を確実にすることで、子どもたちは他者の意見に意識を向けやすくなった。こうして発言内容が反映される形で学び合いが展開するようになっていった。

3. 研究の成果と課題

研究の成果は、①学び合いの中に教員も入り込み、子どもたちが互いに意見共有をさせることで他者への反応が活発化した点、②学び合いをつくり出すためには、ルールを守る意識が必要となる点、が明らかになった。また課題としては、①学び合いの質の向上への取り組み、②子どもがルールづくりに主体的に関わり、自発的にルールを守ろうとする態度を育む方法、③授業のユニバーサルデザイン化を効果的に取り入れる方法、の3つを明らかにすることが浮かび上がった。